台湾の荒れ地を拓いた人びと －徳島県の海外移民－

徳島大学総合科学部 教授
荒武達朗(中国近現代史)

1895 年(明治 28 年)、日清戦争に勝利した日本は台湾を植民地とした。海外領土として充実させる政策の一環として、日本人農民を入植させることが計画された。だが当時の台湾西部は既に漢民族の手で開墾と開発が進んでおり、入植できるような余地は残されていなかった。個人や企業による農業移民が思うような成果を上げることはほとんどなかったのである。一方東部は先住民族(現在の台湾では原住民と称する)たちの世界であり、広大な未墾地が残されていた。

領有化より 15 年経った 1910 年(明治 43 年)、台湾総督府は台湾東部への入植を大々的に推し進めることとした。いわゆる“官営移民事業”である。移住先として現在の花蓮市南郊が選定された。そして入植者の募集が最初に行われたのが徳島県であった。彼らの入植した場所は、その出身地が徳島県であったことから“吉野村”と命名された。ほぼ同時期に設置された豊田村、林田村とあわせて三移民村と称される。

当時は一面の鬼茅の生い茂る荒れ地であり、なおかつ先住民族を追い払った関係上、その襲撃の危険もあった。何よりもマラリアなどの病気の流行は移民たちの生命を直接的に脅かした。渡航前に聞かされていた好条件とは異なった為、離脱者や帰国者が相次いだ。それでも残った人びとは荒れ地を開墾して美田へと変えていったのである。やがて西部からの漢人の入植者も増え、もとからいた先住民族と日本人との多民族社会を形成するようになった。人びとの営みは 1945 年夏の敗戦とその後の引き上げまで続いた。

さてそもそも徳島県人は何故台湾へと向かったのだろうか。1880 年代、徳島の人びとにとって県外とは大阪方面との経済的なつながりと北海道への移住であった。20 世紀に変わる頃、明治 30 年代に入ると椿泊や伊島をはじめ、県内漁民による韓海(朝鮮海)出漁が急増するようになった。西日本各県からの漁民に混じり、統営の吉野町、欲知島、三千浦、釜山の巌南村に県人の拠点が築かれた。一方、台湾が人びとの意識に上がることはこの段階ではほとんどない。商工業･公務員関係の渡航者が台湾に県人会を形成したが、農業関係者は見られない。

徳島県での海外移民ブームが起こるのが 1910 年(明治 43 年)である。同年 8 月 29 日、日韓併合によって朝鮮半島が日本の植民地となった。はやくも 9 月初旬の新聞には徳島県民の朝鮮移民推進についての記事が掲載される。折しも徳島県内では吉野川の改修工事が本格的に議論されており、中下流域の少なからぬ人びとが立ち退きを強いられた。その行き先の一つとして朝鮮が目されたのであった。さらに 9 月末台湾総督府より募集員が徳島県へ派遣された。総督府は北海道移民で好成績を上げている徳島県に白羽の矢を立て、当地農民を台湾へと入植させることとしたのである。募集印は各地を巡回し多数の応募者の中から合計 52 戸の農家を採用した。彼らが最初の正式な入植者として、後に吉野村と命名される七脚川の原野に赴いたのであった。

旧吉野村草分に残る地神

2017 年 6 月 荒武撮影

翌 1911 年(明治 44 年)はこれまでない規模で移民の募集活動が展開された。まず北海道庁は例年の通り全県で募集をし、多数の応募者を得ることが出来た。続いて朝鮮移民を担当する東洋拓殖株式会社が主に吉野川改修地である中下流域を中心に募集員を巡回させた。そして台湾総督府はむしろ徳島県南部の勝浦郡、那賀郡を中心に募集を行った。1911 年は、さながら三地域の募集競争の様相を呈していた。かくして人びとは海外へと向かったのである。

****

総合科学部公開セミナー

第 7 回: **7 月 28 日(金) 18:30～20:00**
対 象: 一般･大学生･高校生 参加費無料
会 場: 総合科学部1号館南棟3階 第 1 会議室
事前申込が必要。駐車場の利用可。
詳 細:総合科学部 HP
http://www.tokushima-u.ac.jp/ias/
申込み･問い合わせ先:
徳島大学総合科学部事務課総務係
TEL:088-656-9779
E-mail: sksoumks@tokushima-u.ac.jp